

医療事故初期対応

前田正一(編)

1999年に重大な医療事故が発生し、医療現場が必ずしも安全ではないことを、患者を含む国民皆が知ることになりました。2001年には、厚生労働省医政局に医療安全推進室が設けられ医療安全の推進を国としても図ることが明確に示されました。各種検討委員会が設けられ、医療安全を推進するためのさまざまな取り組みが行われるようになりました。それから約10年を経ましたが、果たして医療現場がより安全になったといえるでしょうか。

医療現場での研究的な取り組みや他分野の知見を得て、安全のためにすべきことはある程度明らかになってきています。しかし、それがなされないままに10年前と同じような事故が生じているように思います。改めて、医療現場ですべきことは何かという視点で安全確保を検討するときではないかと考えます。

本書は、そのような時期にふさわしい本だといえます。本書のタイトルは、「医療事故初期対応」です。これまで報道されている医療事故の中で、長く紛争が続いている事故の多くは初期の対応が適切でないことから、患者側と医療者側にいわゆるボタンのかけ違いというような状況が生じて、関係者すべてが傷ついたままで修復が困難な状況に置かれているように思われます。

本書の編集者である前田氏も、「はじめに」でそのことについて次のように述べています。「医療事故が発生した場合、それが真に解決されるか、あるいは紛争・訴訟へと発展するかは、行った医療行為に過失があったか否かということよりも、事故の現場保存・原因究明から始まる一連の初期対応が適切に行われたかどうか大きく影響されるように思われる。」

本書は、総論編と実践編に分けて述べられています。総論編の1章は、用語の定義と医療事故や訴訟の現状で、ここでは、日本の医療事故の現状や医療事故に関

連する用語の定義が述べられています。2章は、本書のタイトルとなっている、医療事故発生時の初期対応について詳細に述べられています。3章は、事故調査について、調査委員会の設置や進め方について、また、エラーの分析手法としてのRCAの解説とそのトレーニングについても触れています。4章は、個人情報保護とカルテ開示について、具体的にガイドラインや記録で行うべきことなどが述べられています。これらの基本的な項目は、実際に事故が生じた場合、生じた事象についてどのように判断すべきか、どのような考え方で、何を行うべきかなど、事前に考えておくための参考になるものです。

続く実践編では、これらの基本的な考え方に基づいて、実際に現場で起きている10の事例を用いて、どのような手順で何をすべきかについて、フローチャート形式で判断の進め方と行うべきことが述べられています。このフローチャートは、読者の医療現場で生じやすい事故事例を使って、事故発生時にどのように判断し何をすべきかを明確にしておくために役立てることができそうです。この事例そのものを用いて、現場の医療安全教育を行うことも可能です。

本書は、医療現場で働く人々と医療職をめざす学生達が、医療安全を考え、生じた医療事故に適切に対応するための基本的な考え方を身につけるための必読書です。

慶應義塾大学看護医療学部教授・
医療安全管理学 嶋森好子

●B5 頁232 2008年

定価3,990円(本体3,800円+税5%)

[ISBN978-4-260-00740-5] 医学書院刊